

評価委員総合評価

研究課題名：(地方共同研究) 高頻度衛星雲観測を活用した急速に発生発達する降水系に関する研究

評価委員

委員長：高野清治

委員：齊藤和雄、竹内義明、水野孝則、小泉耕、尾瀬智昭、高野功、高薮出、
鈴木修、前田憲二、山里平、倉賀野連、岡部来

評価日：平成 29 年 2 月 23 日 (書面開催)

1. 総合評価 (判定の理由は、委員所見の欄に記載)

- 非常に優れた研究であった。
- 優れた研究であった。
- 研究を実施した意義はあった。
- 失敗であった。

2. 総合所見

参加官署において高頻度衛星雲観測資料に対する知識の習得やデータハンドリングが進んだことは、研究の成果と言える。急速に発達する対流雲に対する具体的な実況監視手法の確立には至らなかったが、研究を実施した意義はあったと判断する。

高頻度衛星雲観測を活用した発達する積乱雲の検知という、先行研究の少ない分野での取組である。対流雲の発達・非発達を区別する手法は確立できていないが、レーダーエコー出現前に衛星画像に現れるシグナルをトリガーとして、実況監視を強化する作業の流れの提案を評価したい。

新しいひまわり 8 号のデータの利活用について、研究参加者のスキルアップとともに、一定の知見が得られていることは評価したい。

実況監視手法の具体的な改善策を提案するという当初の目的の達成までには至らなかったが、衛星観測資料を用いることにより、ファーストエコー観測前に着目すべき対流雲を捉えられる可能性があることを示すことができた。標準偏差を用いた研究手法については、課題が明らかとなった。必要な計画変更を行いつつ、着実な調査が行われた。実況監視の手法確立に向けて引き続き残された課題に取り組んでいただきたい。

本研究は当初想定していた成果は得られなかったが、一定の成果が得られており、また、研究目標・研究体制の設定についても概ね適切であったと判断できる。

一方、以下のような指摘事項もあり、後年度の他研究等に活かすことを期待する。

- ・ 今後は衛星データだけに偏ることなく、有効な地上データ (アメダス、GPS

可降水量等) のデータも組み合わせて研究の厚みを増すよう努めていただきたい。

- 研究期間内に何を成し遂げようとした計画なのかいまひとつはっきりしない事が気になった。もう少し明確なターゲットがほしいと感じた。
- その後の発達までを見通すことは衛星データだけでは単純には行かないということと考えられるので、今後の発展としては、他のデータやモデル等を併用が必要と思われる。